

# 茨城県立こども病院だより

令和8年3月31日 第61号



表紙写真：新生児救急車(ラッコ号)

指定管理者 社会福祉法人 済生会支部茨城県済生会

## 移行期医療シンポジウム開催 ～地域関係者との連携を深める～

成育在宅支援室長 須能 弘美

茨城県立こども病院では、茨城県地域医療連携推進事業の一環として、毎年「小児在宅医療勉強会」を開催しています。今年度は2026年2月8日に「小児専門病院における移行期医療の取り組み～医療とつながる子どもたちが安心して地域で大人になっていくために～」をテーマに、地域の医療機関・保健・福祉・教育関係者を対象とした移行期医療支援シンポジウムを行いました。

当院からは、移行期医療の現状と取り組み、低年齢からの移行支援、地域医療機関との連携、成人診療科との併診期間の工夫、成人移行支援看護外来の紹介などを、神経科医師、看護師が報告しました。また、当院の患者さんの成人移行を受け入れてくださっている病院や在宅医療の先生方と、成人移行を経験した患者さん・ご家族に、ご登壇いただきました。

成人移行を受け入れていただいている先生方からは、小児と成人の救急体制や在宅医療物品の違い、移行を担う医療機関の少なさ、医療資源の地域差などの課題を挙げていただきました。さらに、蘇生処置拒否(DNR)などの意思決定支援や稀少疾患への対応の難しさも語っていただきましたが、患者さんに寄り添ってのご経験や、当院との併行連携の積み重ねによって課題にも対応が可能であるとの素晴らしいコメントもいただきました。

また、移行を経験されたご家族は、たくさんの不安や大変さを抱えながらも多くの支えによって乗り越えてきた歩みを語られました。「このシンポジウムに参加した皆さんが希望の光です」との言葉が印象的でした。

意見交換では、水戸市医師会をはじめ多方面の関係者からのコメントもいただき、脳神経外科領域の成人移行について具体的な協議が進んだことも成果の一つでした。

アンケート調査では、「移行期医療の理解が深まった」、「地域差の課題を実感した」などの回答が寄せられています。今回のシンポジウムを通して、子どもたちが安心して地域で大人になっていくために、移行支援がさらに確かなものへ育っていくことを願っています。



令和7年度 茨城県小児在宅医療シンポジウム  
2026年2月8日(日)14時～16時30分

座長 茨城県立こども病院 副院長 小池 和俊

小児専門病院の移行期支援  
茨城県立こども病院  
小児神経精神科 院長 岩淵 恵美  
小児看護専門看護師 副看護部長 佐藤 麗子

成人医療における移行期医療  
笠間市立病院  
副院長 稲葉 崇  
ひたちち田家庭医療診療所  
院長 木村 紀志

医療的ケア児の在宅医療  
花小籠診療所  
院長 宮尾 佳子

移行期医療を経験して思うこと  
移行期医療を経験された患者さんとご家族

# 勉強会「子どもにやさしい医療って?」、 交流イベント「こども×あそびフェスタin茨城」開催

保育室 チャイルド・ライフ・スペシャリスト (CLS) 松井 基子

昨年度から、クリニクラウン協会よりお誘いいただき、「こども×あそびフェスタ」というイベントに保育室として参加しています。今年度はリハビリテーション科の有志も参加してくれました。このイベントでは、療養する子どもと家族を支援する地域の団体同士の横のつながりを作ること、療養する子どもの存在を広く一般に知ってもらうことを目的としています。地域の参加団体は、県南・県西からBurano、Histar's Now、かけはしねっと、県央から水戸子どもの劇場、weighty、こども病院保育室の6団体でした。午前中は各団体の活動を報告をして、午後は各団体が遊びのブースを企画しました。当日は200人を超える方々が来場し、ブースを回ったり、見知ったスタッフと語り合ったりするなど、活気にあふれていました。高校生や大学生のボランティアも多く、若い世代に療養する子どもの存在が浸透していく未来を想像したくなる1日でした。

また、今年度はフェスタのご縁がきっかけとなり、多職種でつながる勉強会「子どもにやさしい医療って?」を開催しました。病気とともに生活する子どもたちの存在を知ってもらうことが、子どもの医療に対するまなざしを豊かにし、かつ活動を活性化し、ひいては子育てをする地域の安心にもつながると漠然と考えていましたが、定員の50名を超える方々が来場くださり、手ごたえを感じました。参加者からは、「当たり前だと思っていたが、こども病院の専門性に気付いた」「こども病院に行けばという安心感がある」などの感想とともに、「移行期が心配」「グリーンケアの場所がほしい」などのご意見もありました。また、統合後の体制に対するご質問・ご意見もあり、統合への関心の高さがうかがえました。地域にこども病院や治療を必要とする子どもたちのことを知ってもらう企画をいろいろな形で続けていきたいと思えます。



多職種でつながる勉強会  
「子どもにやさしい医療って?」  
～茨城のこども医療をみんなで考えよう～

こどもにとって「やさしい医療」って、なんだろう?  
医師、臨床心理士、理学療法士、  
チャイルド・ライフ・スペシャリスト、入院を経験したご家族など  
医療や療養環境を支える多様な立場の声を聴いて、  
「こどもにとって大切な医療」や「これからのこども医療のかたち」について  
一人ひとりが考えはじめるための勉強会  
お互い感じたことや考えをそっとつなげる、あたたかな交流の場  
この勉強会は、翌日に開催されるフェスタへつながる“学びの入口”  
こども医療の未来について、あなたと一緒に考えてみませんか?

**参加費 無料**

program

- 子どもにやさしい医療って? こども病院が果たしてきた役割  
茨城県立こども病院 院長 新井 順一さん
- こどもの育ちを支える療養環境を考えるー  
こどもと家族が専門家に会おうということ ～多職種連携を支えるこどもと家族の療養～  
茨城県立こども病院 臨床心理士/公認心理士 鎌賀千尋さん  
～見て、聞いて、知って納得! こどものリハビリ～  
茨城県立こども病院 理学療法士 塩田逸人さん  
治療だけじゃない! 子どもと入院 ～遊びの力～  
茨城県立こども病院 CLS/CLS 松井基子さん
- こどもの入院経験から一 家族が感じたこと、伝えたいこと  
斎藤麻希子さん / 榎本 希葉子さん
- 入院中のこどもを支える仲間たち  
ー クリニクラウン・ヒスターズナウ等の取り組み紹介 ー

2026 1.31 SAT 13:00-15:45 (予定)  
(開場: 12:45)

〈会場〉水戸市民会館 中会議室1  
〈対象〉こどもや小児医療に関心のある方ならどなたでも

主催・お問い合わせ  
認定NPO法人 日本クリニクラウン協会

530-0053 大阪府大阪市北区東広町3-11 天しもビル3B  
TEL: 06-4792-8716 FAX: 06-4792-8746  
E-mail: info@cliniclowns.jp https://www.cliniclowns.jp

WEB QRコード MAP QRコード  
WEBから申し込みをお願いします。当日参加OK

# 第44回日本小児内視鏡外科・手術手技研究会の開催報告

小児外科、小児泌尿器科 矢内 俊裕

この度、「小児外科手術の多様性：無限の引き出し」をテーマに、第44回日本小児内視鏡外科・手術手技研究会を2025年10月30日(木)～31日(金)に千里ライフサイエンスセンター（大阪府豊中市）で開催させていただきました（①）。現地参加+オンデマンドの形式とし、約600名の皆様に御参加いただきました。

当研究会の単独開催ではなく、ほかの4研究会（第35回日本小児呼吸器外科研究会、第54回日本小児外科代謝研究会、第81回直腸肛門奇形研究会、第29回日本小児外科漢方研究会）との合同開催であり、これら5研究会による学術集会をPSJM2025（Pediatric Surgery Joint Meeting 2025）と称しています。これに2025年11月1日(土)に開催された第41回日本小児外科学会秋季シンポジウムが加わって3日間の学術集会となりました。合同開催であるため、水戸市ではなく大阪府での開催でした。なお、秋に開催されるこの学術集会は、小児外科領域では春に開催される日本小児外科学会学術集会に次ぐ大規模なものです。



②会場の風景



③会場の風景



④会員懇親会のひとコマ

ほかの研究会は1日の開催ですが、PSJM2025のうち最も演題数が多い当研究会は2日間にわたって開催されました（②③）。これまで当研究会は口演での発表が主流でしたが、演題数が198演題に及んだため、すべての演題を口演にするわけにはいかず、50演題をポスター発表としました。要望演題としては、「内視鏡外科における手術の多様性：現状と課題」、「小切開手術における多様性：適応の拡大と限界」、「泌尿生殖器系疾患に対する手術の多様性：今後の展望」、「固形腫瘍の治療における手術の多様性：QOL向上を目指して」を挙げました。

病型が確立した疾患に対する手術においては標準化が進むなかでもさまざまな創意・工夫がみられ、また、病態が複雑な疾患に対する手術や稀少疾患に対する手術においては症例に応じた術式の選択を要します。小児外科領域では対象とする疾患の発生頻度が少ないことに加え、少子化による症例数の減少により、一人の医師が経験できる症例や手術は限られているので、各施設で実施している手術における工夫や注意点を参加者が共有することによって今後の診療に役立てることができると考えます。

各研究会合同での会員懇親会では演芸大会に5チームが出場し、当院からは小児外科のメンバーをバックバンドとして私が「黒く塗りつぶせ」（矢沢永吉）を熱唱し、パフォーマンスで会場を盛り上げて参加者に楽しんでいただきました（④）。

2日間の学術集会では活発かつ有意義な意見交換が行われ、盛会のうちに終了することができました。最後に、本学術集会の開催にあたり多大な御支援・御協力をいただきました皆様に、心より感謝申し上げます。



①学術集会ポスター

# 薬 剤 部 紹 介

薬剤部長 堀越 建一

## ○内服・外用・注射薬調剤業務

調剤部門では内服薬や外用薬、注射薬調剤部門では点滴など注射薬の調剤を行っています。

当院では外来処方箋の90%以上を院外発行しており、調剤は入院患者さんの薬が中心です。処方箋は散剤やシロップ剤が多くを占めており、適切な剤型がない薬では錠剤の粉碎や脱カプセルを行うなどして、小児の服用が容易となるように調剤をします。調剤の際には電子カルテで薬歴や検査データなどを確認し、処方された薬剤の用法・用量が適切か、飲み合わせや配合に問題がないかなどをチェックしています。一つの処方を複数の薬剤師が確認する体制をとっており、処方に対し疑義のある場合には、医師によりよい薬物療法を提案しています。さらに、薬剤の取り揃えや事務的業務の補助を行う調剤助手を起用することによって、薬剤師は専門性を活かした業務に集中して取り組んでいます。処方監査、調剤、薬剤管理を適正に行うことにより、患者さんにとってより安全で効果的な薬物治療を提供しています。

## ○無菌調製業務

主に高カロリー輸液および抗悪性腫瘍薬の混合調製を行っています。

混合調製を行う際に、注射薬の特徴（無菌性、異物混入防止、液性など）を把握し、安全性の高い注射薬が患者さんに投与されるよう心掛けています。

高カロリー輸液は調製室のクリーンベンチ内で無菌的に混注を行い、各病棟へ払い出しています。また、抗悪性腫瘍薬は、調製室の安全キャビネット・閉鎖式薬物移送システムを使用し、曝露がないよう細心の注意を払い、医療従事者と患者さん双方の安全を守る体制で調製を行っています。

## ○レジメン（治療計画）の管理とチェック

院内で運用されるがん化学療法レジメンを整備・更新し、診療科と連携しながら治療計画の標準化を図っています。治療前に支持療法を含めた薬剤の組み合わせや投与量が適切かどうかを、患者さん個々の状態（体重、腎機能、肝機能、併用薬など）に基づいて確認しています。

## ○病棟業務

入院患者さんへの医薬品の投薬・注射状況の把握、医薬品安全性情報などの把握と関係部署への周知、持参薬の確認と服薬計画の提案、2種類以上の薬剤を同時投与する場合の相互作用の確認、ハイリスク薬に関する患者さんへの事前説明、薬剤投与時の流量・投与量の計算などの実施、カンファレンスへの参加などを行っています。

また、患者さんに対して薬の効果・飲み方・副作用・相互作用などの注意事項や管理方法を説明し、患者さんやご家族が積極的に薬物治療へ参加できるよう支援しています。さらに、患者さんやご家族から得られた情報を医師にフィードバックすることによる薬物療法の支援も行ないます。

## ○院内製剤

治療に必要な薬であっても製造販売されていなかったり、その薬を使用するうえで特別な加工が必要であったりする際には、院内製剤を行います。市販されていない注射液製剤についても院内製剤として作成する必要がありますが、当院では無菌環境下で注射薬の製剤業務を行う環境や機器の整備が不足しているため、筑波大学附属病院との契約を経て、筑波大学附属病院薬剤部施設を借りての製剤業務も行っていきます。

## ○その他

病院内で使用する医薬品の購入と供給、管理を行っています。医薬品の適切な在庫管理・品質管理を行い、病院内の需要に対して医薬品を迅速に供給しています。また、採用されているすべての医薬品に関する情報はもとより、採用されていない医薬品や、処方箋なしで薬局にて購入することができる大衆薬の情報、医療・医薬品に関する情報を、薬の専門家として評価、判断し、医師・看護師・薬剤師・その他の医療従事者ならびに患者さんに提供することによって、より安全で効果的な薬物治療に貢献しています。



新生児部長 雪竹 義也

新生児科は、隣接する水戸済生会総合病院の産婦人科（MFICU）と協力し、ハイブリッド型総合周産期母子医療センターとして、茨城県の県北・県央ブロックのハイリスク新生児疾患を対象に24時間体制の集中治療を行っています。新生児病棟（NICU15床・GCU18床）における集中治療を活動の主体とし、新生児科医師（後期研修医を含めて10～12名）が、看護師や臨床心理士、保育士らと協力して診療を行っています。

対象とする疾患は、超早産児やハイリスク新生児で、超早産児は在胎22週、出生体重400g前後の児から診療しており、ハイリスク新生児に対しては、人工呼吸管理、一酸化窒素吸入療法、低体温療法、腹膜透析、血液濾過透析などの治療も行っていきます。少子化の影響もあり、最近では入院数がやや減少傾向ですが、年間300名前後がNICUに入院しています。出生体重1500g未満の極低出生体重児は年間50名前後、出生体重1000g未満の超低出生体重児は年間20名前後がNICUに入院しています。

当科の特色は小児外科、小児泌尿器科、心臓血管外科、脳神経外科、整形外科、眼科の協力を得て、緊急な外科治療が必要な疾患に対しても対応が可能なことです。また、院外出生に対しても、24時間365日、新生児専用救急車を用い、分娩立ち合い、新生児搬送を積極的に行っています。

入院診療以外には、退院後の成長・発達のフォローアップも行っています。また、水戸済生会総合病院に入院中の新生児の診察や1か月健診も行っています。

新生児病棟に入院した赤ちゃんのご家族は、入院中から育児上の不安を抱えているケースが多いため、医師や看護師だけでなく、臨床心理士、保育士、メディカルソーシャルワーカー、理学療法士・作業療法士・言語聴覚士に関わってもらい、退院後も多職種が連携し、発達支援、育児支援を行っています。

臨床診療以外には、新生児蘇生法講習会の開催や、母体搬送や紹介症例を中心とした近隣の産科医も参加する周産期カンファレンスを定期的に開催しています。

図 出生体重別入院数の年別変化（10年間）

